

校長室便り (No2) 早いもので、新年度も1カ月が過ぎました！

新緑がとても眩しい季節になりました。生徒たちの新たな学校生活のスタート、そして、湧心館高校の42年目が始まって早1カ月が過ぎました。新入生たちも徐々に学校生活に慣れ、また、上級生たちも新たな決意を持って学校生活を送っているところです。

さて、本年度、全課程の始業式の訓話や入学式の式辞の中で、生徒たちに以下の2つのことについて話しました。

1つ目は「大いに学び、大いに鍛える」ことへの挑戦。

高校時代は頭も、心も、体も一番充実し、活力いっぱい時期である。教室や自宅での学習はもとより、行事や体験学習、部（クラブ）活動、生徒会活動、そして、各自のライフスタイルにおける様々な場や機会を通して、「学ぶ、鍛える」に、精一杯挑戦して欲しい。湧心館ならではの自己実現や進路実現も、待っているだけでは転がり込んで来ない。遠い夢、高い目標も、その実現を心から思い、挑戦することから始まる。「学び、鍛える」への悔いのない挑戦をしてほしい。しかし、全てが上手くいくとは限らない。大切なことは何度も挑戦する「勇気」と「やり通す」又は「諦めない」という強い信念を持つことである。

2つ目は「心の偏差値」を高めてほしい。（※心の偏差値の話をする前に、童話「泣いた赤鬼」のあらすじをおさらいし、青鬼が赤鬼に残した貼り紙の最後の部分、「どこまでも君の友達、青鬼。」というところを引き合いに出し話をしました。）

この童話は、文章そのものは小学校低学年で読めるものだが、小学校低学年で読むのか、小学校高学年か、青年期か、大人になってから読むかで感じ方が異なる。青鬼のように人に嫌がられることであっても、一人の友人のために勇気をもってやれる心の強さは簡単に真似できるものではない。皆さんも、あの人は人間的に素晴らしい、自分もあんな風になりたいと尊敬できる人に出会ったことがあると思う。

例えば、周囲に配慮ができる人、自分の感情を上手くコントロールできる人、どんな人に対しても尊敬する気持ちをもって接する人、責任感のある人、人と協力できる人、人や社会のためにしんどいことができる人、目標に向かってチャレンジする人、辛いことでも頑張り続ける人、集中力のある人、健康管理が上手な人など、湧心館高校はそんな人達の集まりでありたいと思っている。色んな人から、「湧心館の生徒は人物的にいいよね」とか、「心の偏差値ならば湧心館が一番」と思ってもらえる人の集まりでありたい。

頭の偏差値は勉強すれば基本的に上げることができる。しかし、心の偏差値を上げるために何をすればよいのか明確な方法があるわけではない。ただ、私たち大人

は、精神的・肉体的にしんどい経験、辛い思いや苦しい思い、逆にとても嬉しかった経験などをおして、自分の心の偏差値が少し上がったということを経験的に学んでいる。高校生活というのは、どこかでしんどかったり、苦しい思いをしたりする。しかし、またどこかで、充実感や達成感を味わう経験もする。そうした、色々な経験が皆さんの心を成長させ、心の偏差値を高めることに繋がる。色々な経験をおして感じたこと、それらを大事にして高校生活を送ってほしい。きっと皆さんの心の偏差値を上げてくれると思う。湧心館高校で学ぶ皆さんが、青鬼のような心の偏差値の高い人になることを期待する。

以上のことが生徒たちに話した内容の抜粋です。コロナ禍の中、本来あるべき姿の学校生活にいつ戻れるか分かりませんが、今できること、今だからこそやらなければならないこと等を通して、挑戦する生徒、心の偏差値の高い生徒の育成に取り組みたいと思います。

現在、本校グラウンドの片隅や校庭等にタンポポが咲いています。そのタンポポ見ながら、以前ラジオで聞いた話を思い出しました。

「人間は花の美しさばかりに気をとられて忘れがちだが、花は生殖器であって、種をつくるために花を咲かせている。なぜ春に種をつくるのかというと、暑さに弱い草花たちは種の姿になって夏の暑さをしのぐために、2カ月前に夏の到来を感じとり、花を咲かせるようになっていく。中でも雑草は、何よりも仲間との繋がりを大事にしている。」という内容でした。

確かに、草花は自分だけ綺麗な花を咲かせても、周りの仲間と一緒に咲いてくれなければ花粉もつかないし、強い種も残せません。だから、草花は温度や光、夜の長さを計って、同じ季節に花を咲かせるのだそうです。自然界でも、実りを多くするためには自分だけの繁栄はありえません。仲間との繋がり、仲間の繁栄が何よりも大切であるということを改めて思い出しました。



令和3年（2021年）5月11日

熊本県立湧心館高等学校長 打越 博臣